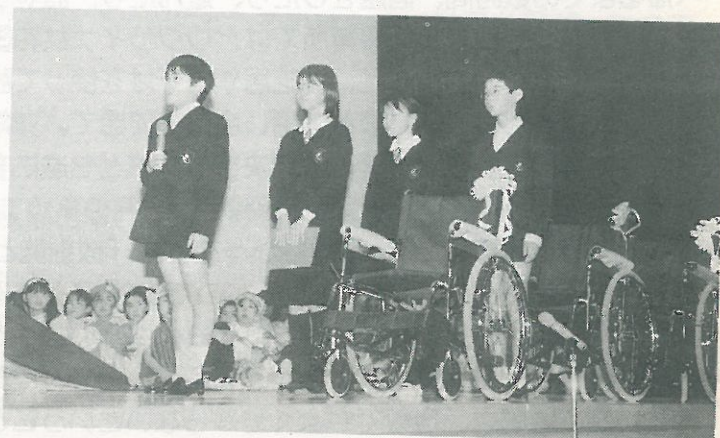


## 今年もまた、私達の心が届きますように!!

私達のクリスマスは、目的を持って準備します。

「愛のかけ橋」で、アルミ缶を集めて車椅子を買うこと。

「ハッピーランチデー」で、おむすび弁当を毎週1回行い、おかず代をミルク代として献金すること。児童会と星の子リーダーが、活動してきました。



今年は、「年間車イス3台」を目標にしていたのですが、アルミ缶が1,053kgも集まり、念願がかないました。ミルク代も15万円お渡しできて嬉しく思っています。毎日の学校生活の中で、常に世界の恵まれていないお友達に心を寄せ、「自分達にできることは何か」を考え、細々とやっている活動です。結果もさることながら、小さな時から他者と共に生きる道を考え、勇気を持ってチャレンジしていける、真に思いやりのある子ども達に育ててほしいと願っています。また、内面を掘り下げ、振り返る習慣を身につけて、相手のある社会の中で、どんな仲間とも共存して逞しく生きることのできる人間を目指しています。

静岡サレジオ小学校（今年度改名 静岡星美小学校）吉平先生より

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00~17:00）

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org



## X'mas カードキャンペーンの活動報告

2003年度のクリスマスカードキャンペーンを担当した、成田幸治です。

インターンとして、チェル救で最初に取り組んだ仕事が、このクリスマスカードキャンペーンのチラシ作り、そしてそのチラシを郵送して、キャンペーンのお願いをしました。文章を書く事に苦手意識もあり、はじめから苦戦しました。同じインターンの伊佐次さんに手伝ってもらい（以後、彼女にはいろいろと手伝ってもらっていました）、なんとかでき上がったという感じでした。（ポーシェにも同封しましたから、皆さんも見てくださいましたよね。）

次に取り組んだ仕事は、「学童保育所でカードキャンペーンの説明会を行う」ことでした。学童保育所は、小学校1年から6年までの子ども達が、学校が終わるとやって来て、自宅へ帰るまでの数時間、宿題をしたり、遊んだり、おやつを食べたりと、小さな社会を体験する場でしょうか。学童保育所では、ウクライナ共和国の事・チェルノブイリの原発事故の事・エネルギーの事など、紙芝居やビデオを使って説明を行いました。エネルギーの事や、これからの暮らし方などの話し合いもできて、非常に充実した時間を過ごせました。

学童保育所で説明会を開く事が決まり、子ども達にも分かるように説明しなければならなくなった時、「自分がどういう目線で、原発の事やエネルギーの事を理解していたのか」を考えさせられました。一番難しかった事は、「放射能とは何か？」でした。大人であれば、放射能と聞けば、なんとなく分かるものですが、子ども達はそうはいかないだろうと思い、子ども達の世界と放射能を結びつけるものはないか？と考えました。が、あきらめました。無理にこじつけて理解させようとするのは止めて、ただ「放射能」とだけの説明にしておきました。結局は、自分でもよく分からないということです。子ども達には、分からない事は分からないと正直に（この事が良い事かどうかは分かりませんが）言いました。中には、消化不良に終わった子もいたかもしれませんが、逆に、疑問を持ち続けて勉強してくれる子もいたでしょう。

学童保育所でのカードキャンペーンは、来年以降も、引き続き行っていただきたいものです。今回は、山里学童クラブ（昭和三山）・ペガサス学童（名東区よもぎ台）と、2つの学童保育所で説明会を行う事ができました。3つ目の学童保育所でも、やらせてもらえるよう打ち合わせを繰り返したのですが、これは実現しませんでした。

今回、皆様からお送りいただいたクリスマスカードは、約1,200通にもなりました。クリスマスカードは、州立小児病院・州立小児孤児院・市立小児病院で治療中の子ども達と、汚染地域の消防署職員の子も達に届けます。（2月の代表団が、写真を撮ってきてくれる予定です。）



発送作業を、スタッフ一同とボランティアの方々に手伝っていただき、12月22日に航空便で送りましたが、現地の郵便事情で、残念ながら、子ども達に届いたのは1年半ばになってしまいました。1月7日（ウクライナのクリスマス）に届かなかったことは残念なことでしたが、これにもめげず、クリスマスカードキャンペーンは、今年の年末も行います。

皆様のご協力に感謝いたします。（成田 幸治）



## ミルクキャンペーン街頭募金（日本も捨てたモンじゃないよね！）

12月14日（日）、栄の三越前で行った街頭募金は、実に33,583円も集まり、大成功で終わることができました。ポレーシェを見て応援に駆けつけてくださった皆様、飛び入り参加してカンパを呼び掛けてくださった皆様、本当にありがとうございました……。準備段階で心配していた協力者が、最終的には11人にもなり、年代も大学生から50代までと幅広く、その事も良い結果に繋がったのではないかと思います。



当日は、とても良い天気でしたが、それでも12月なのでやっぱり寒い…。

買い物の人で賑わう中、募金を呼び掛けました。私は募金に対して楽観的な見方をしていましたが、それでもあの反応の早さには驚かされました。街頭に立って10分で、1人、2人と募金箱の前にやって来てくれましたし、道行く人たちも何となく気になるのか、パネルを見たり、後ろ髪ひかれるように通り過ぎて行ったりしていました。そんな姿が、私をますます「やる気」にさせました。



中でも、一番驚いたのは、たくさんの10代～20代の若者が募金してくれた事です。ギャル風の女子高生、金色の竜の刺繍入りジャンパーを着た若いおにいちゃん、お洒落なおねえさん、ロックのライブ帰りの女の子達、小銭を握りしめて来る小さい子……。中高年の人たちもいま

したが、チェルノブイリを知らない世代がたくさん募金してくれたことに、この事故の大きさと重さを感じました。また、そんな彼らから「何かしたい」という想いを感じ取りました。気持ちはお金では測れないけれど、募金箱の中に、1000円札が14枚入っていたのを見たときは「スゴイ！！」の一言でした。

用意したチラシがなくなってしまう、また、日が翳ってきて寒くなってきたこともあり、予定の時間より30分ほど早く繰り上げてしまったけれど、この企画をやり遂げる事ができて本当に嬉しく思います。

ミルクキャンペーンは、まだまだ続きます。（年中無休です。）引き続き、「カンパにご協力をお願いいたしま～す。」

チェル救インターン

「ミルクキャンペーン」担当 伊佐次 歩





2003年度ウクライナ講座の最終回(12月6日開催)  
アレクシエーヴィチさんの講演会を  
振り返って



〈左から2人目が並木さん〉

2003年度のウクライナ講座は、アレクシエーヴィチさんの著書「チェルノブイリの祈り」「ボタン穴から見た戦争」「アフガン帰還兵の証言」の読書感想会や朗読会、そして10月18日の講演会本番を経て、最終回は講演会から受け取ったメッセージなどについて、フリートークを行いました。

「今の世界を生き延びるために、人の命を大切にするという、新しい世界観を持たなければなりません。それを伝えるためには、新しい言葉が必要であり、その言葉で人々に伝えていく勇気を持たれるように祈ります。」「現在の世界で、自分の命を他人にゆだねるのではなく、自分で守っていくためには、自由でなければなりません。」

この「新しい言葉」「自由」について、皆で熱く語り合いました。「チェルノブイリのことを、いつまで語り続けていくことができるか?」「無知であるがために、被害者にも加害者にもなり得る」「いままで語ったことのない人が発するのが、新しい言葉では?」「新しい言葉とは本当の意味での自由ではないか?」・・・

「自由とはひとりひとりが輝いていること」と言った、若い女性(Fさん)の言葉が印象的でした。わが国でも軍靴の音が聞こえ始めた今、「新しい言葉」を見つけて、それを伝えていく勇気が、早急に必要になってきたと思います。

参加者の中に、「チェルノブイリの祈り」を講談で語っている神田香織さんのマネージャー(並木さん)たちがいらっしゃって、「2004年5月1日に、瑞浪市で独演会をやるので、その前後に名古屋でもやりませんか」とのこと。神田さんの講談も聞いてみたいですね。

(橋本)

「ウクライナをおいしく知る！」

—ウクライナ料理教室—

次回ウクライナ講座開催は...

2004年度は、「ボランティアセミナー」と銘打っての開催ですが、まずはじめは料理!! 胃袋を満たしてから、徐々に頭と体を使ってもらおうという目論見(?)です。堅苦しいことは考えずに、同じ釜の飯を食べましょう。

メニューは、「スープ・ズ・リーソム&ドゥラーニキ」(お米のスープとじゃがいものパンケーキ)。講師は、山崎タチアナさんです。奮ってご参加を!!

◆日 時：2月14日(土)午後1時~4時

◆場 所：東生涯学習センター料理室(地下鉄「新栄」下車。芸創センター東隣)

TEL 052-932-4881

◆参加費：1,000円(材料費を含みます。)

◆定 員：30名・予約制【2月9日(月)までに、事務局までお申し込みください。】

(事務局 TEL 052-836-1073)



まもなく、チェルノブイリ事故から 18 年目がやってくる。ウクライナでも、チェルノブイリのことは過去のことになるようにしているが、一方で、事故の影響を科学的に追求する努力は、嘗々と続けられている。そうした成果の一部を紹介する。

### 農地と森の汚染

OECD (ヨーロッパ経済協力開発機構) の核エネルギー局 (NEA) は、チェルノブイリ事故に関して、「放射線学的健康影響評価」と題する調査結果を、2002 年に発表している。この中で、旧ソ連国内における汚染状況や、農業と環境に与える影響について、現段階での評価を試みている。

セシウム 137 (Cs137) による汚染面積は、37,000 ベクレル (Bq) / $\text{m}^2$  以上が 12.5 万  $\text{km}^2$ 、1 万 Bq/ $\text{m}^2$  以上が 3 万  $\text{km}^2$ 、このうち農地は、5.2 万  $\text{km}^2$  で約 3 分の 1 である。残りは森や湖・川・市街地など。汚染土壌の中の Cs137 の拡散は、土壌の性質・PH・粒度・降雨量・耕作状態など多くの要因によって左右される。

1991 年における汚染地域の表面土壌 (0~5cm) の Cs137 は、25,000~100 万 Bq/ $\text{m}^2$  という脅威的な値だったが、これらの殆どは土壌粒子に結合し、じわじわと農作物に取り込まれた。作物への吸収を減らす対策も考えられ、ウクライナで多いポドソル土壌では、堆肥やミネラル成分の投入が効果的で、ピート質土壌の場合は、砂や粘土が良く効いた。

家畜の肉の汚染除去には、プルシアン・ブルーの投与が極めて効果的だったという。余談だが、この除染方法は、1987 年にブラジルで起きた Cs137 の事故でも、人体内からの排出に効果的だったことが知られている。

こうした対策にも関わらず、農地の 2,640  $\text{km}^2$  は放棄され、原発から半径 40  $\text{km}$  以内の 2,100  $\text{km}^2$  は、永久に利用禁止となった。

事故当初の強力な汚染で枯れた、いわゆる「赤い森」の木々とその表面土壌は深い穴を掘って埋められたが、その容積は 10 万  $\text{m}^3$  に上る。

### 川や湖の汚染

原発のための取水を行っていたプリピャチ川は、最も汚染がひどかったが、事故直後は 1 万 Bq/リットル (L) もあり、それが流入するドニエプル川は、4,000 Bq/L に上がった。

ウクライナの首都キエフの人々は、この川の下流の水を飲んでいる。キエフのダム湖の水の Cs137 は 0.4 Bq/L で、今は健康に有害とはいえないが、今後、川の流域からの流入が続けば、飲み水は危険な状態になり得るので、厳重な監視が必要である。汚染地域の地下水のストロンチウム 90 (Sr90) の汚染は深刻で、今後 10~100 年以内に、飲み水の基準を超えるだろう。映画「アレクセイと泉」の中でこんこんと湧き出していたきれいな泉も、やがて Sr90 の水が出てくることになる。

### 内部被曝が問題

こうした状況から、今ウクライナでは、840 万ヘクタール (ha) の農地が Cs137 汚染地域であり、何らかの対策が必要である。勿論、原発から半径 30  $\text{km}$  以内は居住禁止だが、その外側には 18.5 万 Bq/ $\text{m}^2$  以上の地域に 140 万人が住んでいる。また、55.5 万/ $\text{m}^2$  以上の地域に 13 万人が居る。2001 年時点で、ウクライナの 2,217 の都市が、放射線監視区域に指定されている。

これらの地域では、結局、食べ物や飲み水の汚染による被曝が最も問題である。

ウクライナの食品の汚染基準は、

ミルク：100 Bq/kg、食肉 200 Bq/kg、パンとジャガイモ：20 Bq/kg である。

(河田)



# ＜2004年2月 訪問団特集！！＞

## 代表団スケジュールの紹介

訪問者：メンテナンスチーム（北野達也・江成美絵）

運営委員チーム（小牧崇・石川博仁）

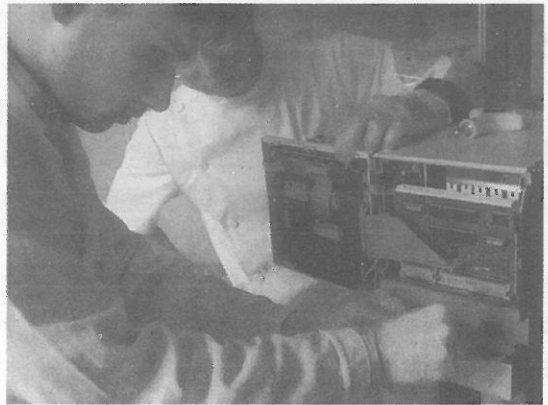
月 日	スケジュール	
	(メンテナンスチーム)	(運営委員チーム)
2月6日(金)	名古屋空港 発(ルフトハンザ 航空) フランクフルト 着	
2月7日(土)	フランクフルト 発(ルフトハンザ 航空) キフ・ホリスホリ空港着 ヅト・ミルへ移動	
2月8日(日)	「ホステック 基金事務所」滞在中の日程打ち合わせ	
	医療機器の所在確認・稼動状況調査・修理機器の把握	「民間療法保養施設(アトコナ)」施設見学と保養事業の進捗状況把握
2月9日(月)	「市立小児病院」(州立小児病院)	
	医療機器の所在確認と稼動状況調査・院内医療機器消耗部品交換・消耗品供給 ※要望があれば、故障機器の修理等も実施予定。	病院内見学 支援事業について打ち合わせ
2月10日(火)	「ヅト・ミル技術工科大学」 今後の支援についての話し合い	
	「医療安全管理学」「生体機能代行装置学」を北野にて講義。教材寄贈(臨床使用不可リサイクル医療機器) アシスタント：アトコナ・ホリスホリ エンスキー氏	「移住者村の診療所」視察
2月11日(水)	「ヅト・ミル技術工科大学」 実習：「生体機能代行装置学」	「ナゾチ地区病院」病院内見学 サマヨウのお婆さんの慰問
	「市立小児病院」 医療機器所在確認/稼動状況調査	
2月12日(木)	「市立小児病院」 故障機器の修理等	「ブルックリン地区病院」病院内見学 「ホステック 基金」 支援事業の打ち合わせ
2月13日(金)	キフへ出発 キフ・ホリスホリ出発(ルフトハンザ 航空) フランクフルト 着	
2月14日(土)	フランクフルト 出発(ルフトハンザ 航空)	
2月15日(日)	名古屋空港 着	

## <ウクライナ訪問団・第5回医療支援活動>

医療法人天神会古賀病院 医療安全管理部  
臨床工学技士 北野 達也  
三菱京都病院 臨床検査・工学科  
臨床工学技士 江成 美絵

年々、チェルノブイリ原発事故被災者支援の  
為の補助金・交付金申請の配分が厳しくなり、  
「限られた財源の中で、いかに継続支援を行なう  
か」が、今後の課題となっています。

そんな中で、2000年より「医療技術専門家  
派遣プロジェクト」の臨床工学技士（厚生労働省国  
家資格）として継続渡航し、3年前から自立支援を目的に、一人の青年「アンドレイ・ポスタ  
ヴェンスキー氏（ジトーミル州立小児病院准医師）」を高度医療専門職に位置づけるべく、  
人材育成プロジェクトを進めてきました。



昨年のメンテナンス活動  
（市立小児病院：左はアンドレイさん）

## <今回(第5回)の渡航目的>

- ① 現地で臨床工学技士（Clinical Engineering Technologist）等の専門職継続養成。
- ② 寄贈医療機器（昨年秋に、船便で送ったりサイクル医療機器を含む）の所在と稼働状況確認、点検・消耗部品交換等
- ③ 「医療安全管理学」「生体機能代行装置学」「呼吸療法全般（気管支喘息重積発作対処法等実技含む）」「内視鏡技術」等に関する院内講義、および、その他の医療技術移転を行う。
- ④ 地元、近郊の病院で、彼らの就職先を確保するために、ジトーミル技術工科大学医療機器操作技術科（5年制）において、講義（座学・実技）および講座を開設し、高度医療専門職を育成のうえ、新たな医療人を輩出する。また、ジトーミル技術工科大学において、実習用リサイクル医療機器の取扱い説明を行う。
- ⑤ 要修理機器調査とメンテナンス（点検・修理および消耗部品の交換）。
- ⑥ 診療材料・消耗品の継続供給。
- ⑦ 各医療施設マネジメント思案。
- ⑧ 現地医療施設の問題、今後の課題検討。⇒次回への課題。
- ⑨ 昨年秋の船便で寄贈した、小児人工呼吸器1台・多用途血漿成分分離器5台の操作説明および点検。

今回も、アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏に、継続的な「実地研修」および「医療技術移転」を行うとともに、さらには「ジトーミル技術工科大学（医療機器操作技術科）」において、自立支援のための人材を育成（高度医療専門職育成事業）すべく、継続的「講座開設」および「臨床工学専攻科（仮称）等設置」のための具体案を提示してきたい。

これらの人材育成事業は、医療の質を高め、小児病院に入院する重症疾患の子ども達を救うだけでなく、その子ども達が将来、自国にて就職先を確保し、自立できるプロジェクトになることを願ってのことである。

今回、新たに三菱京都病院の臨床工学技士の江成さんに応援を頼み、プロジェクトに参加していただくことになりました。また、訪問団として同行の小牧さん・石川さん、よろしくお願ひいたします。支援者の皆様に、新たな活動報告ができるよう頑張ります。



## 久し振りのウクライナ訪問

(小牧 崇)

2月の訪問団に加わって、ウクライナに行って来ます。なんと13年ぶりです。今回の任務については、皆目見当が付きませんので、前回(1991年8月)印象に残った、二つの広場の光景についてお話しします。一つは、ナロジチにある原発事故資料館横の小さな広場…木立の向こうで、馬が数頭草をはんでいる。その前を、大きな草刈り鎌をかついだ男が横切る。広場を囲むベンチでは、老人が数名、お喋りに余念がない。周囲はあふれんばかりの緑…持参した小型放射線測定器のアラーム音を耳にしながら、この光景に接した私は戸惑いました。「リアルであると同時にファンタスティック」「チェルノブイリは未来からのサインで、私達は十分にそれを読みとっていない」…昨秋来日したアレクシエーヴィチさんの言葉が、良く胸に落ちます。二つ目は最終日、キエフでホテルに戻る途中見た光景です。大通りに面した広場に、200名くらいの市民が集まって集会を開いていました。周囲には、黄色と青の旗が林立し、風を受けてひるがえっています。翌日八月政変、年末にはソ連崩壊、そしてウクライナ独立と続き、この黄色と青の旗がウクライナ国旗となることは、その時思いもよりませんでした。

前回の訪問において、「病院で、胸を痛める現実と向き合ったにもかかわらず、妙に明るい印象が私の記憶に残っている」のは、現地の人々が、独立に向けての「希望」を語っていたからかもしれません。独立後の歩みは、必ずしも順調ではありません。また、放射能汚染の現実も、時間が解決してくれるものでもありません。チェルノブイリの活動も、「15年目を迎え転換期」などと聞くと、やや気重になりはしますが、13年ぶりのウクライナを楽しみにしています。

## 会計はまかせなさい!

(石川博仁)

昨年11月半ばに、会計担当としてチェルQの事務所に来てから、はやくも2ヶ月以上が過ぎました。前任の鈴木さんの指導や田中さんのアドバイスなどを受けつつ、なんとか一通りの仕事をこなせるようになってきました。これからは、少しずつ現状の問題点を意識し、もっと扱いやすい会計の処理方法などを、模索していきたいと考えています。素人にもかかわらず、多分に自信過剰なところはご容赦を!



さて、このたびウクライナへの訪問ツアーに参加させていただくことになり、ドキドキしながらも、「何を見られるか、何を聞けるか」と楽しみにしています。東欧どころか、ヨーロッパにも行ったことがないので、気候や雰囲気はどんなだろうと考えています。

事務所では、ほのぼのとした雰囲気を醸し出す私ですが(?)、実は物事をしっかり考えるたちです。今回の訪問を通じて、たくさんの感覚を得て帰って来る予感とともに、いかに我々が遠い世界の人たちと手を取りあって生きていけるのか、その糸口を探し出したいと思っています。「表面的な関わりではなく、もっと細やかな、本当の友情をはぐくめる関係をつくるためには何が必要か?」そういった、いわば誇大妄想に近い夢も携えながら、いざ、はるかウクライナの地へと旅立って参ります! 欠点も多い割に、結構いいところもある(!) 私です。今後とも、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。



## 03 年度奨学生 13 名決定!!

報告が遅くなりましたが、03 年度の奨学事業について報告します。

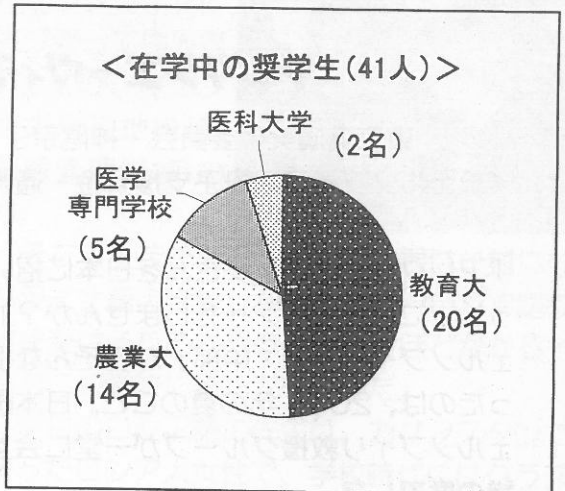
03 年度の新規採用奨学生は、「教育大学 5 名・医学専門学校 4 名・農業大学 4 名」の 13 名でした。残念ながら、医科大学は 0 でした。（応募がなかった）

一方、初回（99 年度）に採用された教育大学の奨学生 5 名が、全員無事卒業しました。

03 年 12 月現在の奨学生数は、「教育大 20 名・医学専門学校 5 名・農業大学 14 名・医科大学 2 名」の 41 名です。医学専門学校が少ないのは、在学年限が短く、回転が早いからです。医科大学は、支給対象に該当する者（被災者の子弟あるいは汚染地区居住者）の中で、医科大に進学する学生が少ないからです。

奨学生の男女比は、女性が 30 名、男性が 11 名です。教育大学では、女性が圧倒的です（20 名中 19 名）。この背景について、機会があれば現地に尋ねてみたいと思います。

奨学事業の財務内容については、04 年度の新規奨学生採用が行われる「今年秋」の時点で報告します。これからも奨学事業へのご支援をお願いいたします。（田中良明）



### \*\*\*今年度奨学生のオリガ・ペトリーヴナ・クラフチェンコさん

<ジトーミル基礎医学短大歯学部にて 2002 年入学>の文章を紹介します\*\*\*

1984 年 11 月 29 日、ジトーミル州オレフスク地区ブチマヌィ村で、勤め人の家庭に生まれました。チェルノブイリの惨事は、精神的な側面而言えば、当初私には何の影響も及ぼしませんでした。私はまだ 2 歳だったのですから。しかしそれは、年配の人たちには巨大な苦しみをもたらしました。特に、財産・家・亡くなった親族・終生そこで暮らしてきた土地を後にし、見知らぬ土地・見知らぬ人々のもとへ移住しなければならなかった人たちに…。しかし、ついにそれができず、汚染地域（…食料品・パンさえもが運ばれることのない、汚染地域の村にあるガラスの割れた家々…）に残って住んでいる、おじいさんやおばあさんがいます。

今、大人になって（18 歳になればもう大人ですから）、私はこの惨事の影響を、我が身に感じます。というのも、今の（チェルノブイリの）若者たちは、かつての若者たちとは明らかに異なっているからです。いえ、異なっているのは、若者だけではありません。私の実家は小さな村にありますが、そこでは 1 日おきに、時には毎日のように、人が亡くなっています。特にガンが多いのです。私自身も、近親をガンで亡くしています。統計は、チェルノブイリ惨事の影響を、私たちがさらに数千年も感じ続けるであろうことを示しています！ 私たちに、神のご加護がありますように……。



# アレクシエーヴィチさんの講演会を終えて

東京講演実行委員会・神尾京子

(チェルノブイリの母子支援募金・通販生活)

「アレクシエーヴィチさんを日本に招いて、いっしょに講演会ツアーをしませんか?」「チェルノブイリ救援・中部」からそんな提案があったのは、2001年の夏のこと。日本国中のチェルノブイリ救援グループが一堂に会する、会議の席でした。

アレクシエーヴィチさんと言えば、チェルノブイリ救援活動に関わる者にとっては、「ぜひ会いたい人」の一人です。いくつかのグループが「やりたい」と手を挙げて(もちろん、私も!),講演ツアー計画が動き出しました。

その後、北海道と広島の反原発グループも加わってくださり、7ヵ所の講演地が決まりました。しかし、顔も知らない人もいるこの集まり、どう連携したらいいのでしょうか。

メーリングリストが解決してくれました。「救援・中部」の若いスタッフが、すぐにメーリングリストを立ち上げてくれたので、相談したいことや提案事項、各地へのお願いごとをここに書き込むことができます。結局、私に限って言えば、北海道・伊那・大阪の方とは一度も顔をあわせることはありませんでした。今回の企画を10年前にやっていたら、もっともっとたいへんだったでしょう。「便利な世の中でよかった」とつくづく思ったものです。

いくら便利な世の中でも、やはり手を動かさなくてはどうにもできないこともたくさんあります。結局、講演直前はバタバタして、「ああ、なんで手を挙げちゃったかなあ」と後悔したのも事実。それを打ち消してくれたのは、アレクシエーヴィチさんの人柄と、講演会に足を運んでくださった人たちの姿でした。苦勞話を語れば、何枚でも書けま



<中央が神尾さん

(国際交流基金事務所にて)>

アレクシエーヴィチさんは、人間が入れない場所へ行って来た。チェルノブイリは、未来から示されてる警告のサインなのです。

私たちはチェルノブイリを正確に理解していない...チェルノブイリは未来から示されてる警告のサインなのです。ストラナ・アレクシエーヴィチ

チェルノブイリは未来から示されてる警告のサインなのです。...

チェルノブイリは未来から示されてる警告のサインなのです。...

チェルノブイリは未来から示されてる警告のサインなのです。...

すがやめておきます。だって今は「やってよかった」の気持ちでいっぱいですから。こんな気持ちにさせてくれたこの企画。実施まで2年をかけて、交渉・調整をしてくれたのは、神野夫妻をはじめとする「救援・中部」のみなさんです。「救援・中部」の方々の粘り強いフォローがあって実現できたイベントでした。感謝しています。:



## 竹内さんのウクライナ便り

前号に、「イラクでの平和維持活動に参加している、ウクライナ軍の通訳が自殺した」という話を書きましたが、その直後に「リベリアでの平和維持軍参加問題」が、最高会議で審議されました。派遣に反対した野党に対し、マルチュク国防相が提出した2種類の数字を、ここで引用させていただきたいと思います。

最初は、「独立以来、ウクライナが平和維持活動に参加して、国連から受け取った報酬の総額が、1億9,400万ドルにのぼる」というもの。もう一つの、さらに驚くべき統計は、「これらの平和維持活動でウクライナの失った人命が合わせて27名であるのに対し、過去5年間にウクライナで亡くなった現役軍人の総数は735名、うち218名は自殺者」というものです。結局、リベリアにもウクライナの部隊は派遣されました。

今年の1月に、広島「ジュノーの会」の代表団が、チェルニゴフ州の汚染地域の地区病院のため医薬品買い付けを行った際、6軒の店舗を持つという私営薬局の社長が、大佐としてイラクに駐屯中の娘婿が送ってきたという写真を見せてくれました。後で聞いたところでは、社長のお母さんはアウシュヴィッツに収容されていたとのことでした。

上記の地区病院が管轄する、村の診療所に行った時にも、その村がドイツとの戦争時にまると焼かれたという話がありました。

しかしそのウクライナも、現在は、旧ソ連圏内では比較的平穏な地域に属しており、やはり「ジュノーの会」代表団がキエフ州立病院の血液腫瘍病棟で会った10歳のアルトゥール君の両親(アルメニア系)も、グルジアのアブハジア共和国で92年に内戦が起こった時、ウクライナに逃げてきたのだということでした。

ソ連時代の89年、お母さんはウクライナのザポロージェで医学専門学校に入学、卒業して帰国するとすぐに内戦が起こり、お父さ

んとウクライナに逃げ帰って住み着いたのが、キエフ州の汚染地域(放射線管理区域)の村。



そこで生まれたアルトゥール君は、村にウクライナ語の学校しかないので、ロシア語教育を受けるため、電車で30分ほどかかるイルペニの学校に通っていました。

学校のロシア語の先生は、カザフスタンで育ったロシア人女性で、学校時代にはクラスに18の民族の子どもがおり、親友は朝鮮系の子だったとの事。(1937年、スターリンによって、「日本のスパイとなる可能性を排除するため」極東から強制移住させられた16万人の朝鮮人の子孫の一人でしょう)。

この人はモスクワで教師になった後、プリピャチで教え、チェルノブイリ事故後疎開してイルペニで働くようになり、プリピャチの文化会館職員で一時同じ寮の部屋に住んでいたタマーラ・クラシツカヤさん(現在、キエフにあるプリピャチからの疎開者の団体「ゼムリャキ[同郷人]」代表)とは、疎開後連絡がとれず、やっと去年になって会えたのだそうです。

昨年10月、急性骨髄性白血病を発病したアルトゥール君は、化学療法の第3クール中に腸内出血が起こり中断中でしたが、「化学療法そのもの以外に必要な薬は両親の負担」だということで、とてもそのような経済的余裕がない両親に代わり、先生が支援を呼びかけて奔走していたのでした。

代表団の一人が、ご自分の関わっている反戦平和グループで支援に取り組むことを約束、その2日後に、予定日が1ヵ月後だったアルトゥール君の母親は、女の子を出産しました。母子ともに、とりあえず元気だそうです。その日が正教の洗礼祭(キリストが洗礼を受けたとされる日)だったため、子どもはクリスティーナと名づけられました。(1月23日)



## 事務局だより

この1月で、2人の研修生が巣立っていく。あっという間の4ヶ月であった。それぞれが決めたプログラムをこなし、次のプログラム…海外研修へと向かう。屈託が無く、頭の回転の速い、好奇心旺盛で笑い声が絶えない伊佐次さん、飄々としてじっくりマイペース、仕事を丁寧にこなし、結構頼りになる成田さん、と個性もかなり違う2人であった。彼らの研修期間中に、アレクシェーヴィチさんの話が聞けたことは、何よりよかったに違いない。核心に、初めから触れてしまったというところか。ともかくも、それなりの充実感を抱いて、飛び立ってくれることと思う。

一方、こちらは「ほとんど何もしてあげられなかった」という感が強い。日常業務に追われ、書類にまみれ、じっくり話し合う間もなかった。しかし、事務局・河田さんは、雑談の中にも、彼らの社会へ向けた疑問や興味に明瞭に答える話が多く、彼らにとっては意味深いものであったかと思う。が、私のばたばたと非能率的な仕事ぶりをみて、どう思ったのだろうか？「反面教師」の役割をしたというだけでは、いかにも情けないのだが…。

さて、2004年の始動をした事務局だが、最初の仕事は「2月代表団・専門家派遣の準備」だ。そして、事務局体制の「抜本的」？見直し。できる事・できない事を明確にし、シンプルにしたい。情報の波に溺れないようなシステムをつくりたい。…等、できるだけ早く検討し、変えていきたい。(山盛)

**近日中にチェルQのホームページをリニューアルします！** リニューアル後は、「掲示板」コーナーも新設しますので、皆さんにメッセージを書き込んでいただけるようになります。どうぞ期待！！

## 編集後記

- ☆初めて、編集作業の現場に立ち合いました。ユーモアあふれるみなさんに、チェルQ魂を見せつけられた思いです！ (石)
- ☆お正月2日目にして数の子を食べ尽くし、数の子欲求不完全燃焼の今現在。かといって、お彼岸に数の子というわけにもいかず、悶々として一年を過ごすのだろうか。 (佳)
- ☆番組表でどうしても見たい番組を見つけた。忘れないようにカレンダーに書いておこうと…え？もう書いてあるじゃないの(驚)！ おお～っ！私の字だぁ…シヨンポリ。(美)
- ☆今年は申(さる)年。「見ざる・言わざる・聞かざる」だなんていっていると、日本は、ますますきな臭くなっていく。『真実から…「目をそむけ猿」「口をとざさ猿」「耳をふさが猿」…私達の子どもの未来のために。』そうだ！今年は、これでいこう！ (J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14  
印刷「エープリント」  
TEL・FAX (052) 871-9473